

校長先生の言葉は皆さんの心に届いていますか？

今日から10月がスタートです。修学旅行、林間学校と大きな行事も無事終わり、高学年は一層たくましくなっているような気がします。下級生のお手本として、その名に恥じない大隅西小高学年としての活躍を期待しています。

さて、先週のお題ですが、いまでこそ46文字のひらがなですが、昔は「ゐ」など300以上のひらがながありました。なぜそんなにたくさんのひらがながあったのでしょうか。

また254文字は消えたのですがどうなったのでしょうか。だれが、いつ、どうやってひらがなを消したのでしょうか？

今回も、早速答えをたくさんのお友だちが書いてくれました。しかも、けっこう正解に近いものがありました。すばらしいですね。よく勉強していると思います。

では、ヒントから考えてみましょう。ひらがなは50音とよばれていますが、46文字しか習いません。残り4文字はどこにいったのでしょうか？これがヒントでした。

まず、本当に「あいうえお表」で46文字か数えてみましょう。確かに「あ」から「ん」までで46文字でした。そしてこの「や行」と「わ行」の抜けているところをいれると確かに50文字になります。

そしてこの「わ行」の「イ」が「ゐ」、「エ」が「ゑ」という発音になるのです。でもなぜ同じ音で文字がいくつもあるのでしょうか。

たとえば、「イ」でもこの「い」は以からきていますが、為からくる「ゐ」もありますし、「意」の「イ」からくるものや、「井」の「イ」からくるカナ文字もあります。つまり、同じ音でもものの漢字が違うので、さまざまなひらがながうまれたの

でした。「エ」や「ア」など他のひらがなも同じです。

なお、「ゐ」や「ゑ」のように今は使われなくなった文字を変体仮名と言います。サ行の変体仮名を例にしますと、今では「すし」と書きますが、今もわざと変体仮名で「スシ」と書いているお寿司屋さんは結構あります。これは校長先生が街でみかけた変体仮名の看板です。食べ物屋さんで結構見かけました。またこんなひらがなもあります。「ゝ」なんと読むのでしょうか？

ヒント：お手紙で「原雅史ゝ」と昔は書くことが多かったようです。

答え：なんとこの1文字で「より」と読みます。このような2つのひらがな「よ」と「り」を合体させたひらがなということで、「合略仮名」といいます。「こと」「なり」「さま」などでありました。このように昔は1つ（2つ）の音を多くの漢字からつくたので、たくさんの変体仮名ができていました。すると、当然困った問題が起きました。どんな問題でしょうか。少し周りの人と聞き合ってみてください。

そう、覚えるカナ文字が多すぎて大変でした。そこで江戸時代の終わりごろには、だいたいよく使われる46文字になっていき、ついに明治33年「小学校令施行規則」という法律で46文字以外は使ってはいけないというルールが決められました。こうして変体仮名はだんだん消えていったのです。でも100年ほど前の明治時代のころは、別のものを使ってひらがなを覚えていました。何を使っていたのでしょうか。少しまわりの人と聞き合ってみてください。

そう、「いろはうた」で覚えていたのですね。このいろは歌はアナグラムの記事としても有名です。アナグラムというのは、文字の順番を入れ替えると、違う意味の言葉になる言葉のことです。

たとえば「あついさ」はいれかえると「あいさつ」になります。「くせがちゅうい」は？「中学生」「りすだと」は？「取り出す」です。「うしだんろ」

は「たんじろう」濁点は無視してもOKです。「いかクイズよ」は「海水浴」。カタカナも無視です。

それでは、今週のお題です。このように、自分でアナグラム問題をつくって、校長室前のボードに書きにきてください。問題だけで結構です。ヒントも答えもいらないですよ。

では、問題のつくりかたのヒントです。

①まず、答えを考えます。短すぎても、長すぎてもだめですよ。

②人の名前、街の名前、ものの名前などからつくってみましょう。

③例えば、校長先生の名前だと

「はらまさし」だから「さらはまし」とかはいかがでしょう。いくらでも問題はつくれます。一番おもしろそうな言葉を問題にしてくださいね。

それでは最後に「うりがあと！」